

潮騒ジョブトレーニングセンター

潮騒通信「どっこい生きてます！」

ダルク&潮騒JTCの精神をリレーしていくことの意味

3月半ばに北海道とかちダルク開設記念フォーラムと横浜ダルクセミナーがあり、ダルク創設者の近藤恒夫さん(日本ダルク代表)が、北海道時代の苦労をつなげる架け橋ができていたという講話をされ、「ダルク精神のリレー」の意味を実感しました。

私たち依存症者は時々「治っちゃった病」に陥りがちですが、薬物やアルコール、ギャンブル等の依存症は生涯治療の病気です。特効薬などなくクリーンとスリップ、入退院の繰り返し(不幸にして死もあります)の中で、辛抱強く回復を目指すしかありません。人間の魂や心の在り方にかかわる奥の深い、重い病気なのです。社会の常識や価値観に当てはめにくいと、ともすると世間は私たちに早急な結果や実績を求め、回復を急がせます。このギャップをどう埋めていくか、施設運営の責任者として私が日頃から頭を悩ませている課題です。

ところで現代医学は病気を細分化して、やたらと病名を付けたがります。科学万能に対する“信仰”に似たものを感じます。これ自体が「現代病」かもしれません。時代の病理といってもいい依存症も、頭で分析して分かるものではありません。だからこそ自助グループの活動が意味を持つのです。

同じように依存症のリハビリ施設であるダルクや潮騒JTCができることは、仲間が仲間の手助けすることだけ。いくら「やめる方法を教えて」と言われても、本人にやめる動機がなければ、どんな名医でも治せません。その意味で私たちの関係はいつもフラットです。新しく登場した仲間と一緒に回復に向け歩むこと。そうして仲間の中で自分も助けられ、不思議なことに自分が変わっていくプログラムです。回復に向けた歩みは個人差があり、とても時間がかかります。

話を戻します。近藤さんはダルクがなかった時代、ヤク中ながらも札幌マックの責任者を任せられ、故ロイ・アッセンハイマー神父とともに北海道のAAの開拓と普及に携わり、冬には零下30度以上にもなる帯広地区を回りました。その時にお世話になった精神科医師がとかちダルクフォーラムに参加しており、30年以上の歳月を経て再会したそうです。旧交を温める中で、近藤さんはAA時代の苦労がよみがえったようで、広い北海道に長く待たれていた2つ目のダルクが誕生したことに、「あの頃まいた種が今花開いた」としみじみと振り返りました。

ともすると日々の忙しさと目の前の雑事に追いたてられている私ですが、近藤さんの話からダルクの精神、そして潮騒JTCの精神を息長く地域でリレーしていくことの重要性を改めて教えられました。

(施設長 栗原 豊)

SITC
SHIOSAI JOB TRAINING CENTER

2012年

4月号 一部100円

Contents

- P1 ダルク・潮騒精神のリレー
- P2 日帰り旅行で花桃鑑賞
- P3 「花桃の里」で俳句作り
- P4 待望の椎茸を大量収穫
- P5 フォト・潮騒シイタケ栽培
- P6 チョーさん回復物語・下
- P7 職業訓練が更に発展へ
- P8 近藤恒夫氏講演 NO11
- P9 全国の受刑者からの便り
- P10 しおさい文芸コーナー1
- P11 しおさい文芸コーナー2
- P12 行事予定&献金・献品



待望のシイタケが大量に収穫できました＝4頁に記事

ピンク色染まった花桃を楽しむ

※日帰りの小旅行として4月9日、入寮者が「日本一の花桃の里」で知られる古河総合公園（古河市鴻巣）を訪れ、満開の花桃を楽しみました。当日は、片道約3時間の長丁場と気温24度の汗ばむ陽気に、やや疲れ気味ながらも一面ピンク色に染まった花桃の下で、お弁当を食べたり昼寝をしたりして、のんびりとくつろぎました。潮騒としては隔月のペースで日帰りミニツアーに取り組みたいですのですが、入寮者が70人を超える大所帯のために、日程調整や資金的な制約もあって全員が一斉に行動するのは難しくなっています。事前の計画と周到な準備、トイレ休憩（アディクトはトイレが近い！）の確保、現地での日程&行動の調整、仲間にはぐれないようにとの気配り、昼食の手配などスタッフは大忙しです。今回は予定していた1～3月にミニツアーに取り組めなかったことから、参加者の期待も膨らみました。夕食や夜の自助グループミーティングなどを考えての急ぎ旅で、もう少し現地での滞在時間を確保できるようにしたいと反省しています。（市）



花桃・俳句作り

ピンク色に染まった「花桃の里」で入寮者らが一句ひねりました。素人の駄句ながらも本音が見え隠れします。潮騒の入寮者は比較的、年齢が高い人が多いので、趣味を兼ねたレクリエーションの文芸活動として、栗原施設長の音頭で俳句作りを推奨しています。



八重桜 潮騒乙女 今見頃（きゆり）

桃は桃 桜は桜で 美しい（オノ）

せわしいな 施設の花見 プログラム（リュウジ）

春來たり 桃の色濃く 空映える（トム）

桃の花 このまま永遠に心みる（エン）

桃の花 独り言う 妻と居て（おとう）

ああ暑い 桃を見に来て 汗をかく（サンチャン）

桃の花 幾年月も 笑顔かな（ハナ）

桃の花 酒飲みたいな 依存症（ヤマ）

桃の花 犬も歩けば 何とやら（キョウスケ）

古河桜 会えずの渡し 越えて桃（ジュン）

桃園で 静かに忍ぶ 我の過去（長吉）

桃の木よ 飲みたい心 慰めて（タカ）

桃桜 潮騒に咲く 笑顔達（イチ）

サクラ咲く 俺の人生 いつ咲くの（チョー）

中国の 国の花見は 桃の花（ホープ）

天気イイ 桃と桜で 春満喫（ガク）

桜咲き 春が来たよと 呼び掛ける（ベガ）

花見なら 飲んでみたいな 焼酎を（ヤスベエ）

潮騒の 風に乗りつつ 桜咲く（バゲ）

4月誕生日の仲間



サンチャン、リュウジ、シュウの皆さん（左から）

＝中古パソコン献品お願いします！＝



潮騒ファイザープロジェクトで実施中のパソコン教室ですが、入寮者のスキルアップのために参加者個人が使える中古パソコンの献品をお願いします。

待望のシイタケ大量収穫～潮騒農産品の第一弾

J1鹿島アントラーズのホーム、県立カシマサッカースタジアム近くにある「潮騒ジョブトレーニングセンター^{しいたけほじょう}椎茸圃場」で今年、入寮者が精魂込めて栽培したシイタケが順調に成長し、収穫期を迎えました。予想外の大量収穫となり、スーパーの青果売り場などで市販されているシイタケと遜色のない出来栄です。支援者や協力者の皆さんに配って食べていただいたところ、とても好評でした。



取り組み始めて3年目。ようやく収穫が見込めるようになりました。シイタケ栽培にかかわった入寮者らが本格的に収穫作業に励み、3月に入ると予想外の大量収穫が続く、ひととき満足げの表情です。大きな達成感を得ると同時に、前向きな労働意欲を引き出していました。このシイタケ栽培が潮騒JTCの農業関係事業としてうまく軌道に乗れば、次は販売面での取り組みです。苦しい台所事情が続く潮騒の運営面にも貢献できるはずです。

自分たちが手塩に掛けた農産品が評価され、一定の販売収益につながれば、ダルクに共通する大きな課題である“生活保護頼み”の施設運営に一石を投じることにもつながります。そのためにも、▽栽培ノウハウ

の体得▽安全性と信頼性の確保▽販路と顧客の開拓▽売り込み・PR活動—を通して、潮騒の独自ブランド化へと夢は膨らみます。

今後、潮騒シイタケが「商品」として認知されるには安全性の確保が何よりも大事です。福島原発事故により茨城産の農産物は「放射能に汚染されている」という“風評被害”を受け、出荷額が落ちています。それだけに今後、潮騒シイタケの販売には放射能測定が重要なポイントになります。

それだけに信頼できる機関や団体の放射能測定機できちんと測定し、国や県の示す安全基準をクリアすることが絶対条件です。結果、OKならそのことをきちんと表示して潮騒ブランドとして販売したいという構想が膨らみます。もちろん今回収穫した分は、すべて安全基準内の数値が検出されています。ご安心ください。

シイタケ栽培は職業訓練としては非常に有望で、入所者の社会復帰に大いに役立つ要素をはらんでいます。原木から切りだしてシイタケ菌を植え、成長したシイタケを収穫する—こうした技術習得は、入寮者が卒業して社会に出ても農業などの仕事で生活の再出発が可能な予感を抱かせます。(サッキー)

潮騒ボーリング大会で優勝、準優勝しました！

◆1位の成績となつてうれしかった

3月に潮騒恒例のボーリング大会があり、いつものように鹿嶋市内のボーリング場を貸し切りに行われました。僕は昨年にも参加しましたが、改めて施設の人数の多さに驚きました。今大会では1位の成績となり、とてもうれしかったです。でも、成績よりも仲間と一緒に遊べたことが良かった。ともすると単調な施設での生活だけに、こうしたイベントがもつとたくさんあったらいいなあと思います。(ユウ)

◆予想外の2位、次は1位を狙います

今年も施設の入寮者が多数参加して、恒例の潮騒ボーリング大会が開かれました。潮騒は所帯のために、ふだん入寮者同士の交流や親睦を深める機会ができてくいただけに、意義ある取り組みです。自分はボーリングがとても好きなので、すごく楽しかったです。当初、今年の大会では3位まで入ればいいなあと思っていたら、なんと2位でした。でも、どうせなら1位になりたかったけど…。次のボーリング大会では1位を狙います。本当に楽しい時間を過ごせました。ありがとうございました。(タツヤ)

潮騒JTCシイタケ圃場と収穫作業



我が回復ストーリー（チョーさんの巻・下）



＝ターニングポイントを乗り越え、潮騒で仲間と共に回復の道へ＝

潮騒に入寮したその日の夜、さっそくミーティング会場でトラブルに見舞われました。足元が暗かったので、ちょっと滑って転んでしまったのです。打ちどころが悪かったせいか痛みがとれず、病院に連れてってもらいました。レントゲンを撮ったら、なんとあばら骨が 3 本も折れていました。先生いわく、「アルコールのせいで 70 歳代の骨になってますね。普通なら打ち身程度で済むんだけど、だいぶ骨が弱くなっているなあ」。今さらながら長年の不摂生を悔みました。

初日からつまづいた私の入寮生活でしたが、その後は順調な歩みが続きました。施設での生活環境にも慣れ、プログラムをやりながらスリッパもせず、なんとか施設生活も 1 年 3 カ月が過ぎようとしていました。しかし、「好事魔多し」「月に叢雲花に風」ではありませんが、アル中にはこの“慢心”が曲者であり、落とし穴です。私の回復への道に試練が訪れたのです。

その年の夏に施設に近い海水浴場に行き、気温 38 度もある炎天下で海を見つめていたら、周りにいた若い海水浴客たちが実にうまそうに冷たい飲み物（ビール？）を飲んでいました。そのうちに私のすぐ隣にいた若い男女 2 人が「おじさん暑いでしょう。これ飲みませんか？」と声をかけてきたのです。彼女の手には冷えたビールがありました。その時の私は、女性の優しい声が自分の回復を試す「悪魔の甘いささやき」に

聞こえたことは言うまでもありません。

喉から手が出るほど飲みたくなりましたが、その一杯を飲むと、また自分が苦しまなければならなくなる。その先には喉の渇きの苦しみとは比較にならない「地獄の苦しみ」が待っている。過去のアル中人生から、嫌と言うほど身に染みた教訓でした。まさにハイパーパワーが与えた試練に、この時の私は「断る勇気」を持っていました。今振り返ると、あの時が私の回復に向けたターニングポイントだったと思います。

あの時、勧められるままに「自分を試す」一杯を飲んでいたら、間違いなく「どん底」に落ちていただろうと思います。この試練を乗り越えてきた自分は今、施設の中で仲間たちとともに回復への道に向けて進んでいます。そして、あと 2 カ月ほどで潮騒での生活も丸 2 年になります。今任せられている役割（スタッフ）を責任重大と思い、自分の回復につなげながら頑張っていきたいと思います。

依存症という病気は一生治らないとよく言われますが、自分がしっかりと前を見て、施設から提案される回復プログラムに取り組み、1 2 ステッププログラムを自分のものにしていきたいと日々、決意しています。そして「今日一日」の精神でアルコールなしの生活を積み上げ、人生を前向きに自然体で生きていこうと思っています。ありがとうございました。（終）

映画プログラムに参加して～入寮者の感想

○：ギャンブル依存のコジです。先日、施設の計らいで映画に行ってきました。私は「ヒューゴ」という 3D の作品を見ました。映画館で見るのは実に 20 年ぶりぐらいなので、やはり DVD などの個人メディアとは違って迫力があるなあ、と感動しました。ましてや 3D ときたから超感動モンでした。今度はアクション映画を 3D で鑑賞したいです。貴重な体験をさせて頂いて施設に感謝してます。（コジ）

○：先日、映画館で観てみたなあと思っていた映画を思いがけず観ることができました。「戦火の馬」という作品でした。うれしかったです。そして泣けました。あまりにもつらい日常を送っていたので、ちょっとしたことぐらいでは、絞っても出ない涙が出たのです。自分自身に対する新たな発見でした。人間は自身のレベルでしか物を見ることができない悲しい存在です。馬の気持ちなんて考えもしないのだろうか？なんて身勝手なんだろう…。でも、私は動物の気持ちがかかる人間でありたい、と思いました。（シマ）

ファイザープロジェクトの職業訓練が更に発展

柱となる農業関連事業に熱い支援



潮騒 JTC が独自に取り組むファイザープロジェクト（薬物・アルコール依存症者の自立支援および就労プログラム開発モデル事業）の柱の一つ、農業分野での職業訓練が順調に推移しています。

先月号で簡単に報告した、4月初旬の雑木林の樹木伐採と整地作業では、入寮者がユニック車の操縦やチェーンソーの操作技術をすっかり体得した様子で、今後の関連事業に期待が持てます。伐採作業は J R 鹿島神宮駅に近い鹿嶋市

雑木林の樹木伐採・下草刈り作用で見違えるほどに整地された区画整理地

宮中緑ヶ丘2丁目の区画整理地内で、背後の急斜面（広さ約1千平方メートル）に生い茂る下草刈りや樹齢20年ほどのシイ約30数本を伐採し、きれいにする作業でした。ベテラン職人の熱心な指導と同プロジェクト作業班のチームワークにより当初の予定よりも早く、約1週間の日程で伐採・整理を終え、依頼主からは隣接部分も手がけてほしいと追加注文があったほどでした。

これに続き、4月中旬からは潮騒 J T C の N P O 法人理事で地元支援者の増古四郎さんの協力な支援により、当初計画になかった雑地開墾による「畑地復元・イモ生産プロジェクト」を急ぎスタートさせました。増古さんが所有する約2千平方メートルの畑地（鹿嶋市猿田北ノ内）を重機と手作業で開墾する作業です。元畑地とはいえ現況は雑木やシノなどが生い

茂り、20年近く荒れ放題だった土地です。これを建設重機を使って開墾する作業が進められています。常時10数人が作業に加わり、これも熟練職人が熱心に指導して若い入寮者らが真剣に重機操作を習得しながら、開墾作業に精を出しています。これについては来月号で詳しく報告できると思います。今月末には水田耕作作業の日程が組まれており、職業訓練として取り組む田植えが始まります。（イチ）



原野と化した2000平方メートルの荒れた農地を重機と手作業で開墾する入寮者たち

結・ダルク25年の歩みから～

近藤恒夫さん講演 NO11 (終)

日本は総依存症国家になった。今こそ当事者主義のダルクの精神を見習ったのだろうか

●曖昧だからダルクはいい

「なんでこいつ、こんなに苦労してまであんなクスリ手離せないのかね？」っていうくらい、薬物依存症は訳が分からない病気だ。それは本人にも分からないし、周りにも分からない。だからこそ大事なことは、分からないことを分かってほしいで曖昧にしたまま付き合う。それが薬物依存症の人たちと付き合うコツだ。ヤク中やアル中、つまり依存症の人たちの回復の秘密というか、奥の深さがそこら辺にあるんだな。とても一筋縄にはいかない。

ぼくに言わせれば、そうした意味でのグレーゾーンを認める器量というか、ものごとを曖昧にする度量がなければ、依存症なんかに手を出さない方がいいと思う。例えば法律とか警察とかは曖昧にできない世界でしょう。そういう世界の人たちは社会秩序を守り、治安を維持して、違反者を逮捕して、裁判にかけて罰を与えることが仕事なんだから。そういう世界では曖昧さは許されない。でも、ダルクは違う。「焼肉食いにいくか?」「いいえ、きょうは結構です!」。これで相手がクスリやってるかどうかわかる。その曖昧さがダルクの救いなんです。依存症の世界は、ある種の曖昧さを残してやるのが救いであり、回復に向けて大事な要素なんだ。

なのに、クスリやっているからすぐ警察呼ぶ? そうしたらダルクなんて今のようになんて60カ所以上もできていないよ。だってスタッフですら、いつ転ぶが分からない世界なんだから。「きょう一日はクスリ使わなかったけど、明日はどうなるか分からない」。それがダルクなんだ。

●無理やり正解を求めない

さて、そろそろ今回の講演のまとめといこう。そろそろ結論に入りたいんだが、ぼくに言わせれば日本は国を挙げての依存大国に思えるな。子どもだけでなくいい大人だって自立を嫌い、何につけてもお任せ主義の国だ。税金払っているんだからと、みんな面倒なことは警察や役所に丸投げする体質が骨

の髄まで染み込んでいる。だから公務員をのさばらしているだと、ぼくは考える。気がつくと、いつの間にか国家権力がどんどん強くなっている。依存症の治療だって、本来の仕事のはずの病院は安易にダルクに丸投げ、自分たちは努力しないで丸投げする。でも、すべてを国家や病院がやってくれると思うのは大きな間違いだ。かつてのような右肩上がりの繁栄はもはや夢物語だからね。今は経済の下り坂に差し掛かっているから、どう転んでも税収は伸びない。みんな生活が大変だ。税金が払える人が減っているのに、要求だけは増えていく。不思議な国だね、日本は。もはや、あれもこれも国家に望むのは土台無理なんだ。じゃあ、どうすればいいか?

国が何もしてくれないと嘆くんじゃなくて、みんなが得意分野で力を出し合うしかない。せめて自分の住む地域だけでもよくしよう、ってね。そこでは、ダルクの当事者主義を見習ってほしい。もちろん、ぼくらができるのは薬物問題に限定されるけどね。依存症の人たちが自立を目指して努力してきた歴史は、ばかにできないよ。その意味でいうと、ぼくは3・11大震災で被災地の人々が地域の絆を強くして、当てにならない国頼りではなく、復興に向けて自力を発揮していることにとても共感を抱く。

●これからは少し曖昧にいきましょう

今は素面(しらふ)の人にとっては何となくおかしい社会だけど、その曖昧なおかしさを認めることから始めてほしい。本来、曖昧でいいところはもう少し曖昧にしていんじゃないか。硬直した規則や窮屈な社会から少しずれるところに、人間の面白さがある。そこにこそダルクの出番がある。正常と異常がはっきりと線引きできにくい社会なのに、みんなやたらと線を引きたがる。相手を蹴飛ばしてまで無理やり「正解」を求めようと背伸びする。すると裁判所みたいな、堅苦しくて面白くない社会になってしまう。だから、みなさん。これからは少し曖昧にいきましょう。これで終わります。(了)

全国の受刑者のみなさんからの手紙～「潮騒通信」を読んで～

■今回の出所を人生立て直しの最後のチャンスに

お手紙有難うございます。(中略) 今回の出所は私にとって最後の出所にしたいし、人生を立て直す最後のチャンスにしたいのです。それには薬物から足を洗い、断ち切ることが最も大切です。2度と覚せい剤には手を出さないようにしたいです。私も65歳、薬のない人生を早く送りたいです。69歳の栗原さん、健康には十分に気をつけてください。(広島 TT)

■できれば栗原さんに身元引受人をお願いしたい

前略。私の身元引受の件でご相談致します。実は、身元引受人が今年に入り亡くなり、他に頼る人もなく、出所してから生活する場がなくなってしまいました。私も薬物とは心から縁を切りたいと思っております。ただ今は〇〇刑務所に務めており、来年2月に出所となります。できれば栗原さんに身元引受人をお願い申し上げます。私も出所する時には65歳となります。残り少ない時間しかなく、もし私に少しでもお役に立てることがありましたら、喜んでお役に立ちたいと思います。それ以前に、薬物から足を洗うことが先決であり、何卒あなた様のお力を私にお貸しください。できますなら、良い返事をお待ちしております。(北海道 MK)

■不安を抱きながらも今回は一度地元に戻ります

私も44歳。だんだん無理がきかない体になってきました。先日さんざん迷惑を掛けて長く疎遠だった妹から、「(出所したら)実家にもどって来てほしい」との手紙がありました。脳梗塞で倒れ、寝たきりの父を介護していた兄が交通事故で半身不随となったため、隣町に嫁いだ妹が毎日実家に通って面倒を見ているそうです。長兄とは昔からソリが合わないままなので話をしてみないと分かりませんが、(薬物依存症の私が)実家に戻るといことは、それだけ誘惑が多くなり、相当な覚悟が必要です。地元ですし、クスリ仲間もたくさんいます。正直のところ、その誘惑に勝つ自信は今の私にはありません。ですが、家族も困っており、悩ましい限りです。出所があと約1カ月に迫っているのですが、やはりクスリを止めていくには同じ境遇の人たちと止めていくのが望ましいことだとは思いますが、今回は一度実家に帰ろうと思います。それでダメなようなら私の足で潮騒に出向きます。(神奈川 UY)

■刑務所の職業訓練が社会で役立つ機会に恵まれず

最近の紙面からは、入寮者の皆さんがファイザープロジェクトに活発に取り組んでいる様子が伝わり、早く自分も皆さんの仲間入りをしたいなあ、と気がはやります。私はかつて某刑務所で小型建設機械の職業訓練を受けた経験があり、他の刑務所では印刷や計算工場などで何年間もパソコンを使っただけの作業に従事してきました。しかし、それを社会で活かして自分の生活を立て直そうという機会に恵まれないまま、薬に溺れてしまい、いつしか操作方法も忘れて何の役にも立てることができませんでした。今考えれば勿体ないことだと思いますが、一人の力なんてしれたもので、やはりしっかりした意識を持った組織や団体みたいなものがサポートしてやらないと、うまくはいかないのかなと思います。その意味で今、潮騒が取り組んでいるファイザープロジェクトは大変に意義あるもので、我々依存症に悩んでいる者にとって、依存症から抜け出す希望の灯のようなものかもしれません。このプロジェクトが良い方向に進んでいくことを願っています。(北海道 YT)

■決意だけでは児童相談所に信用してもらえない

私が栗原さんに身元引受人を依頼した理由は、早く出所したいという気持ちからでした。生まれてから今日まで、自分の息子を児童相談所を通じて施設に預けているのですが、その5歳になる息子を引き取るには、私が薬物依存症から立ち直ったという専門医の証明とリハビリ施設に入所して薬物を絶っていることが必要だと、児童相談所の担当者から指摘されており、そのために息子にも会わせてもらえない状況なのです。本当のところでは仮釈放などどうでもいいのです。…53歳で刑務所を往復する生活は、もううんざりです。2度と薬物に手を出すものかという決意は強いとしても、過去の薬物履歴や前回に続き今回も薬物で逮捕され刑務所に入っている現状から、いくら言葉で立ち直りを誓っても信じてもらえないのが現状であり、行動で示すしかありません。今度こそ私自身のため、息子のために薬物に手を出さないぞという自信があるのですが、それだけでは児童相談所に信用してもらえない状況です。栗原さんと潮騒JTCの力を借りなければ息子にも会えず、引き取ることもできません。仮釈放にしろ、満期出所にしろ、潮騒にお世話になりたいと強く願っています。(青森 SA)





しおさい文芸

選者 桐本石見



青饅を肴に今宵もひとり酌む

潮騒・稔

青饅は芥子菜などを茹でて酢味噌などで和え、それに魚肉貝などをすりつぶしたものを混ぜたもので、その青さが春の季に合う。それを肴に手酌で呑むのだが豪華な料理ではないし、一人でやはり男の哀愁を思う。俳諧の一句です。

古里に老いを確かむ彼岸かな

潮騒・豊

俳句では彼岸と言えば春で、秋は秋彼岸と言いますが、久方に古里を訪ねて墓参りや旧友に会い、また家の周りの木々などを見ても、年日の過ぎるをつくづく知り、我が老いも知る。帰省は何時でも出来るが、彼岸はまた思いも深い句です。

しおさい短歌



「負けるな」と自分自身に言い聞かせ

努力鍛練 修行の日々

(北海道・一夫)

塀の中交したためる目の裏に

新たに会おう友の顔あり

(千葉・大輔)

大寒や余韻の長き獄の鐘

北海道・章三郎

大寒は二十四節季の一つ、一月二十日頃で冬の一番寒い時期でもあるが、空気も澄み遠くの音も聞こえるし、富士山も遠くから見える。その大寒の最中の獄舎の鐘の音は選者には知れないが、句の作者には脳裏に長く細く聞こえ、時には胸に刺さる思いかもしれない。切哀の一句です。

犬を呼ぶ指笛透る雪木立

北海道・一正

今では出来ないが、私の子供の頃の山家では犬の放ち飼いも多くて困る事もあり、また懐いて可愛いのもいて、指笛は難しいが口笛で呼ぶと蒔田の中を走って来た。この句は雪国の獵犬が散歩に放した愛犬を思いですが、指笛の音も実感で雪の木原を彷彿して大景の佳句です。



宝石を撒く如甲斐の春燈し

潮騒・豊

原句は少し変えましたがこれで甲府盆地の春の夜の景も想像出来ますし、甲府の宝石造りへの挨拶の句にもなります、ただし春燈か秋燈か冬燈かで宝石の色も耀きも異なり、春燈には柔らかいメノウなどを彷彿します。

春の日の夕べ山河も墨絵かな

潮騒・豊

古来から春の曙、秋の夕暮として詩歌に称されていますが、詩歌を愛する者には四季を通じて朝も暮れも趣きがあります、その春の旅の夕暮れなどは山国も湖国も薄墨の様な夕べで一幅の墨絵を想います。また地名を入れて、「春の暮甲斐の山河も墨絵かな」などとしても実感の景の句になります。

不忍の池に浮ぶや花筏

潮騒・稔

上野恩賜公園は宮内省から東京市に払下げられたので恩賜の名が付く、その南端の池を、上野の山を忍ヶ丘、また笹茂る丘の篠輪津から不忍池と名付けたとも。また花筏は桜の花などが散り集まって浮ぶのを筏に例えもので、美しい表現でもあるし上野山は古来桜の名所でもあり、この一句も不忍池に相応しく美しい。尚強いて言えば筏は浮くものなので、「不忍池のさざ波花筏」か「不忍池の夕づく花筏」などでも良い。

水郷の広田の彼方山笑ふ

潮騒・稔

「山笑う」は中国宋代の画家郭照の春山の形容の言葉として伝えられたとの事。千メートルを越す高山には例えないが、雑木の茂る低山などの木々の芽や花の形容には絶妙の比喻で、この水郷の丘陵にも叶う句です。

生き様もそれぞれ違ふ寒雀

北海道・一正

冬になると雀に限らず越冬のため太り気味になるが、ことに雀は家近くに来て餌を探すのでその仕草も可愛い。それを見ていると人の生き様が異なる様に雀のそれも違うと思う、生れ、育ち、子を為し、老いる。雀を思う哀憐の句です。

深雪晴れ獄透き通る空の青

北海道・章三郎

原句を少し変えましたが、これで雪は深いながらも晴れ渡る獄舎の空、そして獄舎の中まで空の青さが透く景が見えます。これですと前句より辛いながらも作者の晴れた思いが伝わり、安堵します。ご健吟を祈ります。

日溜りの部屋に立春感じをり

北海道・章三郎

今年は立春を迎えてもなかなか春らしい日和にならないが、それでも部屋に差し入る日の日溜りに春を感じる、ことに雪国山国の人には待ち遠しい春でもあるし、震災の方には尚更でもある。句の作者もまた諸々の思いに春を待つ切望の一句。「日溜りの部屋に春立つ思ひかな」として、「かな」に感動を持たせても良いです。

=しおさい短歌=

★澄み渡る青空見上げ過去思う

老いゆく父母と吾れの青春

(千葉・大輔)

★空見上げ三秒間の逃避行

こころ飛ばして日常へ戻る

(北海道・章三郎)

★さわさわと獄窓(まど)に降り積む雪の音

潮騒のごと耳に聞こえり

(北海道・章三郎)

★冴え冴えと月の光の無言なり

大震災の世を照らしいる

(北海道・広行)

★被曝せし無言の町をさまよえる

家畜の群れを正視できずに

(北海道・広行)

Information

4月主要行事予定

- 21日 秋元病院メッセージ
22日 潮騒家族会
23日 4月誕生会
29日 アディクションセミナー

5月主要行事予定

- 1～5日 田植え(潮騒ファイザープロジェクト)
13日 秋元病院メッセージ
15日 大子南中学校薬物乱用防止教育講演

献金・献品を戴いた方々(3下旬～4月上旬)

▼献金を戴いた方

早川医院 様
石井照明 様
内堀高良 様
高田武義 様
坂西ミヤ 様
古市みどり 様
富井建夫 様
青木大輔 様
堀内 誠 様
岡本紳次郎 様
佐々木ひとみ 様

▼献品を戴いた方

岩田けい子 様
大小森 進 様
高田武義 様
林かつ子 様
村上則彦 様
栗原 昇 様
栗原 稔 様

そのほか匿名の皆様から献品・献金を頂きました。

ありがとうございました。引き続きパソコン

衣類、調味料、等の献品をお願い致します。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は
全員の方に同封させて頂いております。
どうぞご理解の程をお願いします。



編集・発行

特定非営利活動法人

潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)

〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34 号
〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
TEL/0299-77-9099 FAX/0299-77-9091

潮騒リカバリーホーム(中施設)

〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 56 号
〒311-2213 茨城県鹿嶋市中 2773-16
TEL/0299-69-9099 FAX/0299-69-9098

潮騒スリークオーターハウス鉾田

〒311-2113 茨城県鉾田市上播木 1113-39
TEL/0291-39-4872

E-MAIL k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

編集後記

気がつけば、あと1年半で還暦を迎える。時間の流れが早すぎて、生理的な実年齢と精神年齢のギャップは開くばかり。いい年をして、いまだに「青臭い」学生気分が抜けないところがあり、これじゃいけないと我に帰るのだけれど、内面の未熟さは隠しようもない。昔は漠然と、人間歳を取れば精神的にも経済的にも楽になって、余裕が生まれるものだと思っていた。実際、祖父母や親世代はそういう風に見えた。しかし、わが身の現実とはとんでもない。日々、何かに追い立てられ(恐らく時間かな?)、いたずらにエネルギーを消費させられている感じなのだ。そんな時には「ダルクの流儀」に身を任せていくことにしている。ちょうど“よい加減”で生きればいいのか、と。そのライフスタイルを貫く日本ダルクの近藤さんの連載が今月号で終わりました。好評なので来月からまた第3部を開始します。乞う、ご期待。(イチ)

発行所 郵便番号一五七—〇〇七三
東京都世田谷区砧六—二六—二二
特定非営利活動法人 障害者団体定期刊行物協会
(会費を含む) 定価一〇〇円

今月も多くの方から献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。